日本によるウガンダへの国際貢献について
――ウガンダ駐在を振り返って

若い人たちが常に新しいことにチャレンジしようとしている国で。

国際協力機構（JICA）
福原 一郎

コロナ禍でのスタート

「アフリカの真珠」と形容される東部アフリカの国ウガンダに、2021年８月から2024年３月までの約２年８カ月間駐在した。ウガンダは緑が豊かで年中涼しく、そして穏やかな性格の人たちが多いこともあり、多くの苦難がありつつもウガンダの人づくりや国づくりというミッションに対し楽しく前向きに取り組むことができた。本稿では、ウガンダでの印象深かった思い出について振り返りたい。

ウガンダの国鳥「カンムリヅル」

まずは苦難から。赴任当初はまだコロナ禍だったことから、ウガンダ政府による厳しい行動制限により国内の社会・経済は大きな打撃を受け、またJICAの活動も制約が多くある中でのスタートだった。また、2021年10月から11月にかけて首都カンパラ市内で発生した死傷者多数を伴う連続テロ、さらには2022年９月に発生し一時はカンパラ市内でも感染者が確認されたエボラ出血熱のアウトブレイク（2023年１月には終息）、これらに加えて一般犯罪リスクや交通事故リスク（バイクは平気で信号無視するなど交通マナーが悪い）もある中で、JICA関係者が安全・安心に活動できるよう、日本大使館をはじめ専門家の知見も借りつつアクセルとブレーキを柔軟に適切に踏みながら事業運営を進める必要があった。

もう１つ苦難として触れたいのが、ウガンダで2023年５月に制定された反同性愛法である。同法制定を受け、世界銀行は同行の価値観に反するとしてウガンダ政府への新規融資案件の理事会付議を停止すると発表した。ウガンダ最大の援助機関による融資停止が及ぼす将来的なインパクトは非常に大きい。ウガンダでは同法制定以前から同性愛という性的指向をカミングアウトすることが伝統的にタブーであり、同法を支持する国民も多いと言われている。私が知る限り世銀や米国系以外の援助団体は同法設立後も状況を注視しつつ協力を続けているが、理想と現実、あるいは自由と伝統の間で苦悩し揺れるウガンダの経済発展を支えるため、日本として個人としてどのような価値を優先すべきか考えさせられる出来事だった。

長年の協力が認められ

苦難はこのくらいにして、幸せな出来事を振り返りたい。まず挙げたいのが、2021年12月にウガンダの国会でJICAによるこれまでの国際協力をたたえる決議が採択されたことだ。私自身も傍聴席で議論の行方を見守っていたが、多くの議員がJICAの協力に対する感謝の言葉と共に、「人づくり」「相互の尊重」「品質を重視する協力」「魚を与えるのではなく魚の釣り方を教える」など日本の国際協力の特長に言及した。日本による長年の協力が受益国に認められ、ウガンダ国民の代表が日本への感謝を表明する瞬間に立ち会えたことは、先述した数々の苦難を乗り越えるにあたって大変勇気づけられ